

老獸医

伊藤左千夫

青空文庫

糟谷かすやじゆうい獣医いは、去年の暮くれ押おしつまつてから、この外手町そとでまちへ越こしてきた。入り口は黒板くろいたべいの一部を切きりあけ、形かたちばかりと
 いう門がまえだ。引きちがいに立てた格子戸こうしど二枚まいは、新しいけれ
 ど、いかにも、できの安物やすものらしく立てつけがはなはだ悪わるい。む
 かつて右手みぎての門もん柱ちゆうに看板かんばんがかけてある。板も手ごしらえで
 あるう、字ももちろん自分で書いたものらしい、しろうとくさい

幼稚ようちな字だ。

「家畜診察所かちくしんさつじよ」

とある大字のわきに小さく「病畜入院の求めに応じ候」と書いてある。板の新しいだけ、なおさら安つぽく、尾羽打ち枯らした、糟谷かすやの心のすさみがありありと読まれる。

あがり口の浅い土間あさどまにあるげた箱ぼこが、門外もんがいの往来おうらいから見えてる。家はずいぶん古いけれど、根継ぎねつぎをしたばかりであるから、ともかくも敷居鴨居しきいかもいの狂くるいはなさそうだ。

入り口の障子しょうじをあけると、二坪つぼほどな板の間いたまがある。そこが病畜診察所兼薬局びょうちくしんさつじょけん やつきよくらしい。さらに入院家畜の病室しつでもあろう、犬の箱はこねこの箱などが三つ四つ、すみにかさねあげてある。

ほかに六畳の間じょうまが二間と台所だいどころつき二畳じょうが一間ひとまある。これで

家賃やちんが十円とは、おどろくほど家賃も高くなつたものだ。それでも他区たくにくらべると、まだたいへん安いといつて、糟谷かすやはよろこんで越こしてきたのである。

糟谷かすやは次男じなん芳よしすけ輔じれい三女おやこ礼れいの親子四人の家族かぞくであるが、その四人の生活が、いまの糟谷かすやの働きはたらきでは、なかなかほねがおれるのであつた。

平顔の目の小さいくちびるの厚あつい、見たとおりの好人物こうじんぶつ、人と話をするにかならず、にこにここと笑わらっている人だ。なにほど心配なことがあつても、心配ということを知つていそうなふうのない人である。

細君さいくんはそれと正反对せいはんたいに、色の青白あおしろい、細面ほそおもてなさびし

い顔で、用談ようだんのほかはあまり口はきかぬ。声をたてて笑うようなことはめつたにない。そうかといつて、つんとすましているとんでもない。

それは、前途ぜんとにおおくの希望きぼうを持った、若い時代わかじだいには、ずいぶんいやにすました人だといわれたこともあった。実際じつさい気位きぐらい高くふるまっていたこともあった。しかしながらいまのこの人には、そんな内ないしん心しんにいくぶん自負じふしているというような、気力きりよくは影かげもとどめてはいない。きどつて黙だまっていた、むかしのおもかげがただその形かたちばかりに残のこつてるのだ。

天性てんせい陰気いんきなこの人は、人の目にたつほど、愚痴ぐちも悔くやみもいわなかつたものの、内ないしん心しんにはじつに長いあいだの、苦悶くもんと悔かい

恨んとをつづけてきたのである。いまは苦悶くもんの力もつきはてて、目に氣張きばりの色も消えてしまった。

生まれが生まれだけにどことなし、人柄ひとがらなところがあつて、さびしい面ざしおもがいつそうあわれに見える。もうもう我が世はだめだとふかくあきらめて、なるままに身をも心をもまかせてしまつたというふうである。それでもさすがに、ここへ移うつつてきた夜は、だれにいうとはなく、

「引ひつ越こすたびに家が小さくなる」
とひとりごとをくりかえしておつた。

糟谷かすやはあければ五十七才になる。細君さいくんはそれより十一の年下とかいつた。糟谷は本所ほんじよへ越こしてきて、生活の道が確立かくりつした

かというに、まだそうはいかぬらしい。

糟谷が上京以来たえず同情を寄せて、ねんごろまじわつてきた、当区の畜産家西田という人が、糟谷の現状を見
るにしのびないで、ついに自分の手近に越さしたのであるが、糟
谷が十年住んでおつた、新小川町のとにかく中流の住宅
をいでて、家賃十円といういまの家へ移つてきたについては、一
場の悲劇があつた結果である。

二

糟谷は明治十五年ごろから、足掛け十二年のあいだ、下総

種畜場の技師であつた。そのころ種畜場は農商務省の所管であつた。糟谷は三十になつたばかり、若手の高等官として、周囲から多大の希望を寄せられていた。

新しい学問をした獣医はまだすくない時代であるから、糟谷は獣医としても当時の秀才であつた。快活で情愛があつて、すこしも官吏ふうをせぬところから、場中の気受ても近郷の評判もすこぶるよろしかつた。近郷の農民はひいきの欲目から、糟谷は遠からずきつと場長になると信じておつた。

糟谷は西洋葉巻きを口から離さないのと、へたの横好きに碁を打つくらいが道楽であるから、老人側にも若い人の側にもほ

められる。時間のゆるすかぎり、糟谷かすやは近郷きんこうの人の依頼いらいに応じおうて家畜かちくの疾病しつぱいを見てやつていた。職務しよくむに忠実ちゆうじつな考えからばかりではないのだ。無邪気むじやきな農民から、糟谷さん糟谷さんともてはやされるのが、単調子たんちようしの人ひとよしの糟谷にはうれしかったからである。

梅うめの花はな、菜なの花はなののどかな村むらを、粟毛くりげに額白ぬかしろの馬をのりまわした糟谷は、当時とうじわか若い男女の注視ちゆうしの焦点しやうてんであった。糟谷は種畜場しゅちくじやうにおつて、公務こうむをとるよりは、村落そんらくへでて農民を相手に働くのが、いつも愉快ゆかいに思われてきた。そうしてこういうことが、自己じこの天職てんしよくからみてもかえつてとうといのじやないかなど考えながら、ますます乗りの気きになつて農民に親したしむこと

をつとめた。

糟谷かすやはでるたびにいく先さきぎきで、村の青年らを集あつめ、農耕のうこうかい

改良りようはかならず畜産ちくさんの発達はったつにともなうべき理由りゆうなどを説とき、

文明の農業は耕牧兼行こうぼくけんこうでなければならぬということなどをし

きりに説とき聞かせ、養鶏ようけいをやれ、養豚ようとんをやれ、牛はかならず

洋牛ようぎゆうを飼かえとすすめた。人望じんぼうのあつた糟谷の話であるから、

近郷きんこうの農民はきそうて家畜かちくを飼こうた。

糟谷はこのあいだに、三里塚りづかの一富農ふのうの長女と結けつ婚こんした。い

まの細君さいくんがそれである。細君の里方さとかたでは、糟谷をえらい人と

思いこみ、なお出世しゅつせする人と信じて、この結婚けつこんを名譽めいよと感かんじて

むすめをとつがし、糟谷のほうでもただ良家りやうけの女によということが

ありがたくて、むぞうさにこの結婚は成立した。それで男も女も恋愛に関する趣味にはなんらの自覚もなかった。

精神上からみると、まことに無意味な浅薄な結婚であつたけれど、世間の目から羨望の中心となり、一時近郷の話題の花であつた。そして糟谷夫婦もたわいもない夢に酔うておつた。

三

過渡期の時代はあまり長くはなかつた。糟谷が眼前咫尺の光景にうつつをぬかしている間に、背後の時代はようしやなく推移しておつた。

さつぼろのうがっこう さまばのうがっこう
 札幌農学校や 駒場農学校 あたりから、ぞくぞくとして農
 うがくじようじゆういがくじよう しんしゆうさい
 学 上 獣 医学 上 の 新 秀 才 が でてくる。 勝島獣医学
 はくし こまばのうがっこう
 博士が 駒場農学校 のまさに 卒業せんとする数十名の生徒
 をひきいて 種畜場 参観にこられたときは、教師はもちろ
 ン生徒にいたるまで糟谷のごときほとんど眼 中になかった。
 糟谷が自分の周囲の寂寥に心づいたときはもはやおそか
 った。糟谷ははるかに時代の推移から取り残されておった。場
 ちよう
 長の位置を望むなどじつに思いもよらぬことと思われてきた。
 いまの現在の位置すらも、そろそろゆれだしたような気がする。
 ものに屈託するなどいうことはほとんど知らなかつた糟谷も、に
 わかに悔恨の念禁じがたく、しばしば寝られない夜もあつた。

糟谷はある夜また例のごとく、心細い思案にせめられて寝られない。

なるほど自分はうかつであった。国家のためということを考えて働いた。畜産界のためということも考えて働いた。人民のためということも考えて働いた。けれどもただ自分のためということとは、ほとんど胸中になく働いておつた。なんといううかつであつたらう。もうまにあわない、なにもかもまにあわない。

糟谷はこう考えながら、自分には子どもがふたりあるということをつよく感じて、心持ちよく眠っている妻子をかえりみた。長男義一はふとつてつやつやしい赤い顔を、ふとんから落としてすやすや眠っている。妻は三つになる次男を、さもかわいらしそうに

胸むねに抱だきよせ子どものもじやもじやした髪かみの毛けに、白くふつくらした髪をひつけてなんの苦くもない面おも持ちもちに眠ねっている。糟谷そうやはいよいよさびしくてたまらなくなつた。

自分になんらの悪わる気ぎはなかつたものの、妻が自分にとつぐにについては自分ただいに多た大だいな望のぞみを属しよくしてきたことは承しようち知ちしていたのだ。そうことばの穂ほにでたときにも、自分は調ちようし子しにのつて気休きやすめをいうたこともあつたのだ。

結けつ婚こん当とう時じからこころのこころをいろいろ回かい想そうしてみると、妻つまに對たいしての氣めいのどくな心こころ持もち、しゅうとしゅうとめめんに對たいして面めん目ぼくない心持しんぢち、いちいち自分自分をくるしめるのである。かれらが失しつ望ぼう落らく胆たんすべき必ひつ然ぜんの時じ期きはもはや目のまえせまに迫せまっていると思う

と、はらわたが煮えかえつてちぎれる心持がする。自分はなんらおかした罪はないと考へても、それがために苦痛の事実が軽くなるとは思へないのだ。

糟谷はまた自分の結婚するについてもその当時あまりに思慮のなかつたことをいまさらのごとく悔いた。家とか位置とかいうことを、たがいに目安にせず、いわば人と人との結婚であつたらば、自分の位置に失望的な変遷があつたにしろ、ともないあわれんで、夫婦というものの情合によつて、失望の苦も慰むところがあるにちがいないだろうが、それがいまの自分にはほとんど望みがないばかりでなく、かえつて夫婦間におこるべきいやな、いうにいわれない苦痛のために、時代に捨てられる

さびしさがいつそう苦しいのである。それもこれも考えればみな自分のうかつから求めたこともとでまぬがれようのない、いわゆるみずからつく作れるわざわいだ……。

恋愛れんあいなどということただただばかり思っていたが、恋愛のとぼしい結婚はじつにばかげておった。ばかげているというよりも、いまはそのあさはかな結婚のために、たまらないいやなくなるしみをせねばならぬことになった。

こう思つて糟谷かすやはまた妻つまや子の寝姿ねすがたを見やつた。なにか重おもいものでしつかりおさえていられるように妻つまや子どもは寝入ねいつてい
る。

いよいよ自分も非職ひしょくとなり、出世しゅつせの道がたえたときまつた

ら、妻はどうするか、かれの両親はどういう態度たいどをするか、こういうときに夫婦ふうふの関係かんけいはどうなるものかしら。いつそのこと別わかれてしまえばかえって気は安いが、やはり男の子ふたりのかすがいが不本意ふほんいに夫婦をつないでおくのだろう。

「しようがないから」「どうすることもできないから」「よんどころないからあきらめている」というような心持ちで、いかにもつまらない冷ひややかな家庭を作っていねばならないのか、ああ考えるのもいやだ……。

うっかりして過渡期かどきの時代におったというのが、つまり思慮しりよがたならなかったのだ……。ここをやめたからとて、妻子さいしをやしなつてゆくくらいにこまりもせまいが、しかたがない、どうなるもの

か益えきのない考えはよそう。

考えにつかれた糟谷かすやは、われしらずああ、ああと嘆たん声せいをもらした。下女げじよがおきるなど思つてから、糟谷はわずかに眠つた。

四

翌よくちよう朝ちようはようやく出しゅつきん勤きん時間じかんにまにあうばかりにおきた。よほど顔かおいろ色がわるかつたか、

「どうかなさいましたか」
と細君さいくんがとがめる。糟谷かすやはうんにやといつたまま井戸端いどばたへでた。食事しょくじもいそいで出しゅつきん勤きんのしたくにかかると、ふたりの子どもは

右から左から父にまつわる。

「おとうさん、おとうさん」

「とんちゃん、とんちゃん」

かすや糟谷はきょうにかぎって、それがうるさくてたまらないけれど、

こぼんのう子煩悩な自分が、毎朝かならず出勤しゅっきんのまえに、こうして子

どもを寵愛ちようあいしてきたのであるから、無心むしんな子どもは例れいのごと

く父にかわいがられようとするのを、どうもしかりとばすこともできない。

「きょうは遅いおそからいそぐだ」

とすこしむずかしい顔をして子どもは聞き入れそうもしない。

かすや糟谷はますますむしゃくしゃして、手をだす気にもならない。

「ねいあなたちよつと抱だいてやってくださいな、ほんのすこし、ねいあなたちよつと」

細さいくん君から手移てうつしに押おしつけられて、糟谷かすやはしようことなしに笑つて、しようことなしに芳輔よしすけを抱だいた。それですぐまた細さいく君くんに返かえした。糟谷かすやはこのあいだにも細君の目をそらして、これら無心むしんの母子をぬすみ見たのである。そうしてさびしいはかない苦痛くつうが、胸むねにこみあげてくるのである。心臓しんぞうの動悸どうきが息のつまるほどはげしく、自分で自分の身がささえていられないようになつた。糟谷は、

「もう遅おそいつ」

とおちつかないそぶりをことばにまぎらかして外そとへでた。外へで

るがいなや糟谷は涙なみだをほろほろと落おとした。いますこしのところで妻つまに涙なみだを見られるところであつたと、糟谷は心で思つた。

糟谷は事務所じむしょの入り口で小使こづかいを見た。小使はいつもていねいにあいさつするのだが、けさはすぐわきをとおりながらあいさつもせずについてしまつた。糟谷かすやはいやな気持ちかすやがした。事務所へはいつてみると、場じょう長ちやうはじめ同僚どうりやうまでに一種しゆの目で自分自分は見られるような気がする。いつもは、

「糟谷かすやさんこうしてください」とか、

「これはこれしておきましようかね」

とか、うちとけてむぞうさむぞうさにいうところも、みようにあらたまつて命令めいれい的に事務じむの話をするのである。糟谷はもうおちついて事

務がとれない。

あるいは非職ひしよくの辞令じれいが場長てもとの手許てもとまでできてでもいやせぬかとも考える。まさかにそんなに早くやめられるようなこともあるまいと思いなおしてみる。糟谷つくえはへいきで仕事をしてるようなふうをよそおうて、机つくえにむかっているときにはわかりきっていることをわざわざ立たつていつて同僚どうりように聞きいたりしている。

場長じょうちやうが同僚どうりようと話をしているのに、声こゑが低ひくくてよく聞ききとれないと、胸騒むなさわぎがする。そのかんにも昨夜さくや考かえたことをきれぎれに思しいださずにはいられない。人ひとびとがおのおの黙もくして仕事しごとをしているのを見ると、自分おのれはのけものにされてるのじゃないかという考かんえを禁きんずることができない。

場長がなにか声高こわだかに近くの人に話すのを聞くと、来月らいげつには
 いるとそうそうに、駒場農学校の卒業生そつぎようせいのひとり技手ぎしゅとし
 て当場とうじょうへくるとの話であつた。糟谷かすやはおぼえずひやりとする。
 それから千葉県ちばけんの某それがも埼玉さいたま県の某それがも非職ひしよくになつたという話を
 している。それはみな糟谷かすやと同出身どうしゆっしんの獣医じゆういで糟谷かすやの知人ちじんで
 あつた。糟谷かすやはいまの場長の話は遠まわしに自分に諷ふうするのじや
 ないかと思つた。

糟谷かすやはつくづくと、自分が過渡期かときの中間ちゆうかんに入用にゆうような材ざいと
 なつて、仮小屋かりごや的任務てきにんむにあつたことを悔くやんだ。涙なみだがいつのま
 にかまぶたをうるおしていた。

糟谷かすやがぼんやりしていると、場長ははじめおおくの事務員じむいんは、み

んな書類しよるいをかたづけ、退場たいじやうの用意をする。そのわけがわからなかつたから、糟谷はうろたえてきよろきよろしている。ようやくのこと人びとの口気こうきできようの土曜日どようびというに気づいた。糟谷はいまがいままできようの土曜日ということわすを忘れておつたのだ。

糟谷は土曜と知つて目がさめたようにたちあがつた。なるほど、そうであつたな、すっかり忘れていた、とにかく都合つごうがえい、それではきようさつそくじやうきさう上京して、あの人に相談そうだんしてみよう、時とき重先生が心配してくれ、きつとどうにかなる、東京にいることになれば位置いちが低くても勉強べんきやうができる、なるべく非職ひしよくなどいふ辞令じれいを受け取らずに、転任てんにんしたいものだ、飯めしくつてすぐとで

かけよう。

糟谷かすやはこう考えがきまると、よろめく足をふみこたえたように、からだのすわりがついた。ふみだす足にも力がはいつて、おおいに元気づいて家に帰ってきた。

「とんちやんとんちやん」

という声も、いつものごとくにかわいかった。

糟谷かすやが芳輔よしすけを抱だいて奥おくへあがるとぎる碁仲間ごなかまの老人がすわりこんでいる。

「きょうは先生、ぜひとも先せんじつ日の復讐ふくしゅうをするつもりでやってきました。こうすこしほかほかあたた暖かくなってきましたすと、どうも家にばかりおられませんかから」

老人は糟谷かすやの浮うかない顔などにはいつこう気もつかず、かつてに自分のいいたいことをいつている。糟谷は役所着やくしよぎのまま東京へいくつもりであるから、洋服ようふくをぬごうともせず、子どもを抱だいたまま老人と対座たいざした。

「これはせつかくのご出陣しゅつじんですが、じつはそのちよつと東京へいつてくるつもりで……はなはだ残念ざんねんだが……」

「いやそりや残念ですな、日帰りですか」

「今夜こんやは帰れませぬ」

「それじゃきようじゆうに東京へいけばえい。二、三席勝せきしやうぶ負してからでかけても遅おそくはない。うまくいつて逃げようたつてそうはいかない」

農家の楽隠居らくいんきよに、糟谷かすやがいまの腹はらのわかるはずがない。糟谷かすやはくるしく思うけれど、平生へいぜい生心せいしんおきなくまじわった老人であるから、そうきびしくことわれな、かつまたあまりにわかに変かわった態度たいどをして、いまの自分の不安心ふあんしんをけどられやせまいかというような、あさはかなみえもあつた。

とうとう二、三盤打ばんうちつことにした。人間も糟谷かすやのような境きょう遇うに落おつるとどつちへむいても苦痛くつうにばかり出で会あうのである。

糟谷かすやはその夕刻ゆうこく上京して、先輩せんぱい時重ときしげ博士はくしをたずねて希望きぼうを依頼いたいした。

「うむ、いますこし勉強するにはそりやもちろん東京へくるほうが得策とくさくだ、位置いちを望のぞまないと、どうとかなるだろう、

しかしきみたちのように、まにあわせの学問をした人はみなこま
つてゐるらしい、いますこし勉強するのはもつとも必要ひつようだね」

糟谷かすやはがらにないおじようずをいったり、自分ながらひや汗あせの
でるような、軽薄けいはくなものいいをしたりして、なにぶん頼むたのを数
十ぺんくり返かえして辞じした。

「これでも高等官こうとうかんかい」

糟谷かすやは自分で自分をあなどつて、時重博士ときしげはくしの門をかえりみた。
なに時重さんくらいと思つたときもあつたに、いまは時重と自分
とのあいだに、よほどな距離きよりがあることを思わないわけにいかな
かつた。妻子さいしを振り捨すてて、奮然ふんぜん学問のしなおしをやつてみよ
うかしら、そんならばたしかに人をおどろかすにたるな。やつて

みようか、おもしろいな奮然ふんぜんやってみようか。ふたりの子どもを妻つまのやつが連れて三里塚りづかへいつてくれると都合つごうがえいが、承しょう知ちしないかな。独身どくしんになっていま一度ど学問がくもんがやってみいたいなあ。子どもはひとりだけだなあ。ひとりのほうは妻つまがつれていくにきまつてる。いちばん奮然ふんぜんとしてやってみようかな。

糟谷かすやはくるしまぎれに、そんな考えかんがをおこしてみたものの、それも長くはつづかず、すぐまたぐつたりとなつて、時重博士ときしげはくしがいつてくれた「どうかかなるだろう」を頼たよりにわずかに安心するほかはなかつた。

よくよく糟谷かすやは苦悶くもんにつかれた。遠いさきのこととはとにかく、なにかすこしのなぐさめを得えて、わずかのあいだなりとも、この

つかれのくるしみを忘れる^{わす}娯楽^{ごらく}を取らねば、とてもたえられなくなつた。酒好き^{さけず}ならばこんなときにはすぐ酒^{さけ}に走るところだが、糟谷^{かすや}は酒はすこしもいけない。

糟谷^{かすや}はとうとう神楽坂^{かぐらざか}に親^{した}しい友人^{とも}をたずねた。そうしてつとめて、自分が苦勞^{くろう}してる問題^{もんだい}に離^{はな}れた話^{わたり}に興^{きよう}を求め、ことさらにたわいもないことを騒^{さわ}いで、一晚^{ばん}ざる碁^ごをたのしんだ。翌日^{よくじつ}もざる碁^ごをたのしんだ。

糟谷^{かすや}はその後日^{ごにちよう}日曜^{にちよう}たびにかならず上京^{じようきよう}しておつた。かくべつ用^{もち}がなくても上京^{じようきよう}しておつた。種^{しゆ}畜^{ちゆう}場^{じやう}近郷^{きんきやう}の農家^{のうけ}から、牛^{うし}がすこしわるいからきてくれの、碁会^{ごかい}をやるからきてくれのとしきりにいうてきたけれど、いっさい村落^{そんらく}へでなかつた。土曜

日日曜日をうかがつて、遊あそびにくるものがあつてもたいていは避さけて会あわないようにした。

胸きょう中ちゆうに深しん刻こくな痛いたみをおぼえてから、気き楽らくな悠ゆう長ちゆうな農のう民みんを相あ手てにして遊あそぶにたえられなくなつたのである。

糟かす谷やはついに東とう京きやうに位い置ちを得えられないうちに、四し月げつ上じゆう旬じゆん非ひ職しよくの辞じ令れいを受うけ取とつた。

五

農のう商しやう務む省しやうにもでた、警けい視し庁ちゆうへもでた。いづれもあまりに位い置ちが低ひくいので二に年ねんとはいられずやめてしまった。そのうち府ふ下か

の牛乳搾取業者の一部が主となつて、畜産衛生会といふものができた。ちようど糟谷が遊んでおつたをさいわいに、その主任獣医となつた。糟谷は以来栄達の望みをたち、碌ろくたる生活に安んじてしまった。愛想よくいつもにこにこして、葉巻きのたばこを横にくわえ、ざる碁をうつて不平もぐちもなかつた。

ただ一度細君に対しては、もはや自分は大きい望みのないことをさらけだし、いまの自分に不足があるならばどうなりともおまえの気ままにしてくれというた。その後は細君から不満をうたえられても相手にならず、ひややかな気まずいそぶりをされても、へいきに見流しておつた。そうして新小川町に十余年おつ

た。

糟谷かすやはいよいよ平凡へいぼんな一獣医じゆういと估券こけんが定さだまつてみると、どうしても胸むねがおさまりかねたは細君こぎみであつた。どうしてもこんなはずではなかつた。三里塚界隈りづかかいわいでの富豪ふごうの長女ちやうむすめが、なんだつてただの一獣医じゆういの妻つまとなつたか、たとい種畜場しゅちくじやうはやめても東京とうきやうへでたらば高等官こうとうかんのはしくれぐらいにはなつておれることと思つておつた。ただの町獣医まちじゆういの妻つまでは親類しんるいに会あわせる顔かほもないと思おもうから、どう考えてもあきらめられない。それであけても暮くれても鬱うつうつたのしまない。

なにかといつては月のうちに一度ひとも二度ふたも里方さとかたへ相談そうだんにいく。なんぼ相談そうだんをくりかえしても、三人の子持ちとなつた女はも

はや動きはとれない。いつもいつも父母兄弟から相あいも変わらぬ気休めをいわれて帰ってくる。

運うんがわるいのだ、まがわるいのだ。若くて死しぬ人もいくらもある世の中だ。あきらめねばなるまい。あきらめるよりほかに道はない。こう百度も千度もくりかえして、われと自分をいさめてみても、なかなかその日がおもしろいという気になれないのだ。

糟谷かすやは細君さいくんがどういうことをしようといやな顔もしないから、さすがに細君もときには自分のわがままを気づいて、

「わたしがなにぶん性しょうぶん分ぶんがわるいものですから、わたしも自分の性しょうぶん分ぶんがわるいことは心得こころえていますけれども、どうもその今こんにち日にちをおもしろく暮くらすという気になれませんで、始し終ゆうあ

なたに失^{しつれい}礼^{れい}ばかりしておりますけれども」

などと遠^{とお}まわしにわび言^{ごこと}をいうことさえあるのである。

種^{しゅちくじょう}畜^{じょう}場^{ういらい}以来^{いらい} この人を知^しつてゐる人の話^わを聞^きくと、糟^{かすや}谷^やの奥^{おく}さ

んは、種^{しゅちくじょう}畜^{じょう}場^{ういらい}にいた時^{じぶん}分^{ぶん}とはほとんど別^{べつじん}人^{じん}のようにおもざしが
変^かわつてしまつた、以^{いぜん}前^{ぜん}はあんなさびしい人^{ひと}ではなかつたとい
てゐる。

こればかりは親^{おや}の力^{ちから}にもおよばないとはいうものの、むすめが
苦^{くもん}悶^{もん}のためにおもざしまで変^かわつたのを見^みては、実^{じつ}の親^{おや}として心^{こころ}
配^{はい}せぬわけにはゆかない。結^{けつきよく}局^{よく} 両^{りやう}親^{しん}は自分^{じぶん}たちの隠^{いん}居^き金^{かね}を
全^{ぜんぶ}部^ぶむすめにあたえて、

「ふたりの男^{おとこ}の子^こをせい一^{いっ}ぱい教^{きょう}育^{いく}しなさい、そうしてわが

世よをあきらめて、ふたりの子の出世しゅっせをたのしめ」

とさとしたのである。糟谷かすやの妻つまもやつと前途ぜんとに一道どうの光をみとめて、わずかに胸のおさまりがついた。長らくのくもりもようやくうすらいで、糟谷かすやの家庭にわずかな光とぬくまりとができた。家か畜衛生会ちくえいせいかいのほうもそうとうに収入しゅうにゅうがある。ただ近隣きんりんから、「糟谷かすやの奥おくさんは陰気いんきな人ねい」といわれるくらいのことと六、七年間はうすあたたかい平穩へいおんな月日を経過けいかした。

長男義一ぎいちは十六才になつて、いよいよ学問はだめだときまりがついた。北海道に走つて牧夫ぼくふをしている。三里塚りづかの両親あいも相ついで世を去さつた。跡取りあととの弟は糟谷かすやをばかにして、東京へきても用

でもなければ寄らぬということもわかった。細君の顔はよりはな
はだしく青くなつた。

六

十一月も末すえであつた。こがらしがしずかになつたと思うと、ね
ずみ色をした雲が低く空をとじて雪でも降ふるのかしらと思われる
不快ふかいな午後ごごであつた。

糟谷かすやは机にむかつたなり目を空くうにしてぼうぜん考えている。細
君はななめに夫おつとにたいし、両手をそでに入れたままそれを胸あに合わ
せ、口をかたくとじて、ほとんど人にんぎ形ようのようすわっている。

この人をモデルにして不満足ふまんぞくという題だいの絵えなり彫ちようこく刻こくなり作さくつたならばと思おもわれる。ふたりはしばらくのあいだ口もきかなかつた。

三女の礼子れいこが帰かえつてきて、

「おとうさんただいま、おかあさんただいま」

とにこにこしておじぎをしても、父も母もはいともいわない。礼子れいこは両りようしん親しんの顔をちらと見たままつぎの間まへでてしまった。つづいて芳輔よしすけが帰かえつてきた。両親りようしんのところへはこないで、台だいどこ所ろへはいって、なにかくどくどく下女げじよにからかつてる。

「芳輔よしすけのやつ帰かえつたな、芳輔よしすけ……芳輔よしすけ」

「きようはほんとに、なまやさしいことではあなたいけませんよ」

「こら芳輔」

父の声はいつになく荒あらかった、芳輔は上目うわめ使いに両親の顔をぬすみ見しながら、からだをもじりもじり座敷ざしきのすみへすわった。すわったかとするともうよそ見をしてる。母なる人は無言むごんにたつて、芳輔よしすけの手を捕とらえて父の近くへ引ひき寄よせた。

「芳輔よしすけ……おまえはいま家へきしなに小川さんに会あつたらろ」

「知りません」

「そうか、小川さんはおまえの保ほ証しょう人にんだぞ、学校からおまえのことについて、二度ども三度も話があつたというて、きようはおまえのことについていろいろの話をしていかれた。いま帰つたばかりだがきさまといき会あはずだが、いやそりやどうでもよいが、

きさまはいくつになる」

芳輔はこういわれてすこし父をあなどるような冷^{れい}笑^{しょう}を目に
浮かべる。

「自分の子の年を人に聞かねたって……」

「こら芳輔^{よしすけ}、そりやなんのことです。おとうさんに対して失^{しつ}礼^{れい}な」

「だっておとうさんはつまらないことを聞くから……」

「だまれこの野郎^{やろう}……」

両親はもう手もふるえ、くちびるもふるえてすぐにはつぎのこ
とばがでない。母はまたたきもせずわが子の顔^こを見つめている。

「芳輔^{よしすけ}、きさまはなにもかもおぼえがあるだろう。きょう小川

さんの話を聞くと、小川さんはおまえのために三度も学校へよばれたそうだと。きのうは校長まででてきて、いま一度芳輔の両親にも話し、本人にもさとしてくれ。こんど不都合があればすぐ退校を命ずるからという話であつたそう。どんな不都合を働いた。儀一はあのとおりものにならない。あとはきさまひとりよりもりに思つてれば、この始末だ、警察からまで、きさまのためには注意を受けてる。夜遊びといえはなにほどこいつてもやめな。朝は五へんも六ペンもおこされる。学校の成績がわるいのもあたりまえのことだ。十五になつたら十六になつたらと思つてみてれば、年をとるほどわるくなる。おかあさんを見ろ、きさまのことを心配してあのとおりやせてるわ。もうそのくらいの年に

なつたらば、りょうしん 両親のくしん 苦心もすこしはわかりそうなものだ」

「おかあさんはもとからやせてら……」

母はこのぞんざいなよしすけ 芳輔のことばを聞くやいなやひいと声をたてて泣なきふした。父も顔青ざめて言ごんく句がでない。

「おとうさん、わたしすこし用がありますからにしきちよう 錦町までいつてきます」

そういつてよしすけ 芳輔は立ちかける。なにごとにも思いきつたことのできないかすや 糟谷も、あまりに無むしんけい 神経なよしすけ 芳輔のものいいにかつとのぼせてしまった。

「このやろう 野郎ふざけた野郎だ……」

もうぜん 猛然立ちあがった糟谷はわが子を足もとへ引ひき倒たおし、ところ

きらわずげんこつを打ちおろした。芳輔はほとんど他人とけんか
 するとき語気と態度で反抗した。手足をわなわなさして見て
 おったかれの母は、力のこもった決心のある声をひそめて、あ
 なた殺してしまいなさい。殺してしまいなさい。罪はわたしがし
 よいます。殺してしまってください。もう生きがいのないわたし、
 あなたが殺されなけりやわたしが殺す……。こうさけんで母は奥
 座敷へとび去った。……礼子と下女は泣き声あげて外へでた。
 糟谷も殺すの一言を耳にして思わず手をゆるめる。芳輔は殺せ
 殺せとさけんで転倒しながらも、真に殺さんと覚悟した母の血
 相を見ては、たちまち色を変えて逃げだしてしまつた。
 礼子は外から飛び込みさまに母に泣きすがつた。いっしょけん

めいに泣きすがつて離れない。糟谷も座につきながら励声に妻を制した。隣家の夫婦も飛び込んできてようやく座はおさまる。

糟谷はまだ手をぶるぶるさしてる。礼子はただがたがたふるえて母を見守っている。母はほとんど正気を失つてものすさまじく、ただハアハア、ハアハアと息をはずませてる。はつきりと口をきくものもない。

ようやくのこと糟谷は、

「増山さん（となりの主人）いやはやまことに面目もないしだいで、なんとも申しあげようありません」

「いやお察し申しあげます、いかにもそりや……まことにお気のどくな、しかし糟谷さんあまり無分別なことをやってしまつて

は取りかえしがつきませんよ、奥さんはよほど興奮こうふんしていらつしやるから、しばらくお寝ねかしもうしたがよろしいでしょう」

「どうも面目めんぼくありません」

ほとんど人のみさかいもないように見えた細君さいくんも、礼子れいこや下女じよや増山ますやまの家内かないから、いろいろなぐさめられていうがまとこまに床とこについた。やがて増山ますやま夫婦まふうふも帰った。あとへ深川の牛乳屋ぎゅうにゅうや某それがしがくる、子宮脱しきゆうだつができたからというので車で迎むかえにきたのである。家のありさまには気がつかず、さあさあといそぎたてるのである。糟谷かすやはとつおいつ、あいさつのしようにも窮きゆうして、いたりたつたりしていた。

子宮脱しきゆうだつはかれこれ六時間以上いじょうになるといふ。いちばん高い

牛だから、気が気でないという。糟谷はいかれないともいえず、危険な意味ある妻を下女と子どもにまかせてでるのはいかにも不安だし、糟谷はとほうに暮れてしまった。おりよくもそこへ西田がひよつこりはいつてきた。深川の乳屋も知ってる人と見え、やあとあいさつして遠慮もなくあがってきた。

「うちでしたな、えいあんばいであつた。じつはころあいのうちが見つかったもんですからな」

西田の聲がして家のなかの空気は見るまに変わってしまった。陰鬱な空気が見るまにうすらぐような気がした。糟谷は手短かにきょうのできごとから目の前の窮状を西田に語つた。

「うん、きみもかわいそうな人だな、なるほど奥さんも無理はな

い。ああ奥さんもかわいいそうだし」

涙なみだもろい西田にしだは、もう目をうるおした。礼子れいこもでてきて黙だまつて

お辞儀じぎをする。西田はたちながら、

「子宮脱しきゆうだつならなるだけ早いほうがえいでしょう。糟谷かすやくん職しよく

務むはだいじだ。ぼくが留守るすをしてあげるから、すぐと深川へで

かけたまえ」

西田はこういい捨すてて、細君の寝間ねまへはいった。細君も同どうじよ

情う深い西田の声を聞いてから、夢からさめたように正気しょうきづい

た。そうしてはいつてきた西田におきて礼儀れいぎをした。

「いま糟谷くんからかいつまんで聞きました、もうひとすじに

思いつめんがようございますよ」

細君は、

「ありがとうございます」

と細い声でいってさんさんと泣くのである。

「それじや西田にしださんちよつといつてくるから頼むたの」

と糟谷かすやは唐紙からかみの外から声をかけてでてしまった。

西田は細君さいくんに対し、外手町そとでに家のあつたこと、本所ほんじよへ越し

てからの業務ぎようむの方法ほうほう、そのほかこの家賃やちんのどこおりまで

弁済べんさいしてあげるといふことまで話して、細君をなくさめた。

子どもをりっぱにして自分がしあわせをしようと思つても、それはあてにならないから、なんでも人間のしあわせといふことは、自分でできることの上に求めねばならぬ。とかく無理むりな希望きぼうを持も

つてると、自分のすることにも無理ができるから、無理とくるしみを求めるようになるなどと話されて、細君もひたすら西田の好意に感じて胸が開いた。

あかしのつくところに糟谷は帰ってきた。西田は帰ってしまいうにしのびないで、泊まって話しすることにする。夜になって礼子や下女の笑い声ももれた。細君もおきて酒肴の用意に手伝った。

糟谷は飲めない口で西田の相手をしながら、いまいつてきた某氏の家の惨状を語った。

ひとりむすこに嫁をとって、孫がひとりできたら嫁は死んだ。まもなくむすこも病気になった。ちようどきよう某博士というのがきた。病気は胃癌だといわれて、家じゆう泣きの涙でいた。

牛のほうはそうきないけれど、むすこは助かる見込みみこがない。おふくろが前掛まえかけで涙なみだをふきながら茶をだしたが、どこにもよいことばかりはないと、しみじみ糟谷かすやは嘆息たんそくした。

西田はあいさつのしようがなく、

「ぼくのような友人があるのをしあわせと思ってるさ」と投げなげだすようにいう。

「ほんとにそうでございます」

と細君はいかにもことばに力を入れていった。芳輔よしすけは、十時ごろに台所だいどころからあがつてこつそり自分のへやへはいった。パチリパチリと碁ごの音は十二時すぎまで聞きこえた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」ジュニア版日本文学名作選、偕成社

1964（昭和39）年10月1刷

1984（昭和59）年10月4刷

初出：「中央公論」反省社

1909（明治42）年3月1日

※表題は底本では、「老獣医 へろうじゆうい」となっています。

※三女に対する「礼」と「礼子」、長男に対する「義一」と「儀一」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

老獣医

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>